

茅葺の上の青き苔

しづかりふかい

宝珠蓮華寺にある清倉院の高麗は茅葺であつた。

茅葺には深い苔が生し、秋の明晰な光があたつて、苔の青が眼に染み入る。睿かさは喩えようもない。存在はそれだけであるがままだるだけで、美しく、ただ物的な無味乾燥ゆえにむしろ奥深くあらゆる哲理を含み、甚深である。非情が倫理を超越して蒼穹のよう、星辰の天宇のように神々しい。あでやかさを孕むくらい枯淡な和の侘ひの美。

暖かい小春日和の日だつた。風は涼やかで乾いている。空気が光の粒が見えるようにきらきら輝いていた。秋の空気の匂いは懐かしい気分させる。郷愁を感じさせる。豊かな美りの安堵が民族的にそう感じさせるのか。綾が微笑んで振り返る。妻のこういう笑顔は久しぶりだ。彼はそう感じた。娘の石段を走って上がった下がりながらずっと笑い続けている。

「ねえ、門前にお茶屋さんがあるわ」

抹茶アイスだ。蓬蓊紗、大丈夫かな」

「ちよつと早いかな、いふふ」

郊外にある清澄で由緒ある閑静な寺院。綾も善哉もこういう場所が好きだつた。きっと娘も同じ感性を育むに違いない。換えて美しい秋の日。

木耳工業株式会社は、木材で箸や杓や字や匙や箸などを工作る職人の四代目、木耳削治に始まる。もくしやという看板で、家族経営だったが、腕とセンスに優れ、昭和五〇年代後期に或る眼鏡製造会社からフレームの一部となるツル、テンプル及びモダンを木で作製するよう依頼され、その眼鏡がヒット商品となり、同社から大量発注を受けるようになったことが切っ掛けであつた。以来、OEM Original Equipment Manufacturer オリジナル・エキップメント・マニファクチャラー）となってその会社のブランドを冠するフレームを作り、名を上げ、他社からも発注を受けることとなるに至り、既に八八歳であつた削治の手に負えず、倅の梨太郎がフレーム製作部門を独立させ、株式会社を立ち上げた。昭和六二年の事である。

当時、日本はバブル景気の絶頂期で、世界の高級品が日本に集まっていた。高級志向は高まり、木耳工業の精巧なラインの樹脂フレームが大ヒットしたため、従業員を大幅に増やし、生産ラインを増幅し、ほぼ家族経営に近かつた会社は従業員千数人を抱えるまでになった。しかしバブル崩壊後は売り上げが激減、経営状況は衰微する一方、負債を抱えるようになるも、梨太郎の長子、凌亮は高級志向を止め、職人のこだわりを前に出さず、身近なグッズを廉価で作し、足で稼ぐようにするうちに売り込み活動をし、一九九〇年代後半にじわじわ売り上げを伸ばして木耳工業を甦らせた。凌亮は世紀が変わると同時に五〇代後半で早々に引退し、娘の鈴に継いだ。婿であつた彼は離婚し、西欧放浪の旅に出ってしまった。

彼女は秋田にある大学の寮に入り、卒業後、八年間父親を補佐し、二〇〇二年に社長に就任した。彼女は職人の血を継ぐも事務に堪能ではないので、前社長の右腕で、当時経理課長であった三六歳の平静不^{ひらびたふしじ}天^あが大いに援ける仕組みが自然に出来上がった。就任二年後の或る日、

平静課長、わたしの大学後輩が地元の会社を辞めてここに就職したいらしいのよ」

社長の大学なら優秀な人材なんでしょうね。ただ友情で推薦は困りますよ。当社は余裕はありませんから。戦力にならなければ困ります」

彼はこみにたいに、伝統があつて、儲けに囚われない理と、理窟を超えた職人のこだわりでできている世界に生きがいを感じるタイプなのよ、あなたとは大違いだね。いずれにせよ、うちは事務屋が不足しているわ。つて言つか、課長と事務の佐々木さんしかないじゃない。経理に堪能な人が欲しいのよ。彼はその専門だね。大学でもそれを研究していたのよ。卒論は『イタリアで生まれた複式簿記』だったそうよ。卒業後は地元中堅企業の経理畑ですつとやってみたい。

大学時代はサークルで知り合ったんだけど、温厚誠実で緻密で信頼できるわ。お金を預ける以上、信頼できる人物じゃなくちゃ困るわ。でも探すのは大変なのよ。わたしたちみたいな小さな会社でコンプライアンスを維持するのはとても難しい、つて且頃から考えているのよ」

サークルつて？

「ロック・ミュージック・サークル」わなび^{あかひなとよしぞ}よ。赤門義政くんつていの」

赤門は経理と営業を兼務し、十年を経て平静が専務取締役になったとき、経理課長に昇進し、経理専任となった。同時に結婚し、三年後には一人娘も生まれる。慎ましく、世間の騒がしさも遠く、淡々と木材の質感を活かして微妙なラインの美しい製器を作る木工の世界は彼にとって最も幸いな場所であった。人にひけらかすこともないプライドも感じている。生活のすべてを繊細に遺漏なく組み上げようと掛け、会社の近くに二〇年ローンでマンションを買い、歩いて通勤した。三〇年後は七〇歳だが、その前に退職金を返済できるはずだった。それに退職後も働かせてくれるところを探して働くつもりだ。貯金もある。具体的なお配はなく、楽しい日々とも言えた。いや、むしろ多くの人と同じストレスや漠然とした様々な不安はある。出勤時は胃が重いとや、かわらだが鉛のように感じられる目もある。そんなときは通勤途中にある美しいスタンドグラスのクラシカルな白い教会を見ると心が少し安らぐのであつた。いつか入って見たいと思っている。

二〇一〇年代、会社の経営はリーマン・ショック以来の世界的不況の影響もあり、再び傾いていた。赤門が四一歳の或る日、四半期決算を控えて残業し、財務諸表のうち貸借対照表の元になる各データを確認していたときだった。後つに平静が立つ。

赤門くん

「はい、何でしょうか」

「マジエスティック・メガネに納まるWhite 100本を本期に載せてくれ」

「ええと」

「度言わせるな。それとも言つてゑとがわからんのか。冗談じゃない、ベテラン課長のくせに」

「いえ、しかしそれは来季の納税分を当期に載せることになってしまってますよ」

「当然そうさ、わかっている。だから言っているんだ。来季のものは黙っていても来期に入れるが、今期に入れるにや言わなきゃならんのだ」

「しかしそれは」

「それでは何だ？ わが社の状況は君もよく知っているだろう」

「ええ。しかし売り上げを高くしてしまつと粉飾になります」

「だからそれを言っているんだ」

「来季の売り上げが減ります」

「バカか？ 来季もあるんだ。青山メガネやサンガ光学レンズやアカデミック眼鏡に納品する分もあるんだ」

やむなそうした。翌日、契約している税理士事務所の税理士が来て書類を見たが、何も言わなかった。不思議に思ったが、税理士はちら側の味方をしてくれているのだと考え、納得した。決算後、外部監査人として契約している公認会計士が磯部に来た。赤間は今度、そタメだと観望するも、今回も何も起こらなかった。「みんなわかつてるんだ。結託してるんだ」そう気が附くやがて仕入の計上げ来期に回すようになった。それでも足りない。

平静の要求は高してきた。

棚卸資産を架空計上したり、不良在庫を計上したりするよう指示される。こうすれば財務諸表の上の見掛けは売上原価が減少し、すなわち利益が水増しされる。売上原価というものは、期首の商売在庫に当期の仕入額を足し、期末の商売在庫を差し引いて計算するので、期末の商売在庫を大きくすれば結果的に売上原価が減り、利益が増えるように見えるのである。飽くまで架空だ。

また、少額の固定資産を資産計上して償却していくことも指示された。

現行税法上、固定資産の基準を、耐用年数二年以上で、取得額が二〇万円以上の資産と定めているので、たとえば一〇万円の機器で耐用年数二〇年があるものならば費用としてそのまま売り上げから差し引かなければならぬので、利益を減するが、この少額の資産を資産計上すると、耐用年数に応じて減価償却できるので、この例なら、一〇年に分散して二年二万円ずつ売り上げから差し引くことができるので、費用が抑えられ、利益水増しの効果がある。

そして遂に、

「いえ、それはできません」

「命令に従えないのか。もう相手の承諾はあるんだ」

「しかしそれは犯罪です。誤記・誤認と言い逃れできません。刑法にも触れます。背任です、虚偽記載罪です」

君は家族を路頭に迷わせたのか。経営状況が悪ければ銀行の融資も受けられない。取引先の信用調査にもパスできない。つまり会社は倒産し、我々は破滅する」

「いずれ破綻します。財務諸表上は利益があるので株主に利益配分しないわけにいかないし、利益が増えれば源泉納税額も増えま

す。実際の儲けがないのに配当や税金を増やせば余計苦しくなるだけです」

「いましかない。今日を生き残らなければ、そもそも明日は来ないのだ」

「でもそれは……無理です」

君は以前に瀬御厨くんが納期を前倒しにしてくれと頼んだとき、呑んだぞうだね」

「え、なぜそれを」

先週彼が金を借りたいと言って来てね。断つたんだが、そんな話を土産に置いて行つたのだよ。そういうネタでも小出しにすれば金が無くてきつと思つたんだろう。甘い奴、愚かな奴だ。人を裏切る奴など信用されるはずがないことがわからない。自分は大丈夫だと思つている。自分は赦されると考へている。だから裏切りができる。典型的な、何もわかつちやいない野郎だ、あの男は」

「そんな」

裏切られたのだ。

瀬御厨は木工工の営業の一人だったが、成績が悪く、一年前に退社した。在職中に懇願され、一度だけ赤門は要求を呑んでしまつていた。軽佻浮薄なのに、彼にはどこか憎めないリリシズム的な匂いがあり、赤門にとっては逆らえない畏怖にも近い。怖くはなかったが、感覚があつた。年下で東北の出身で同情する気持ちもあつた。それが仇になつたのである。

平静が去つた後も赤門は固まつたように考へ続け苦悶する。確かにいまのままでは未来がない。だがそれは言つても、専務取締役の要求は、明日の破滅ではない。二つの道を比較しても、いま路頭に迷つか明日迷つかの違いではない。いや、違いは歴然だ。いま路頭に迷つても犯罪者ではないが、明日迷えば犯罪者なのだ。

赤門は大学の先輩でもある社長室に行った。彼女は脚を組んで坐つている。衰えた容色がどこか懶惰で美しい。かつてはあでやかな大きな眼がいまは皺が寄せて、でもそれがおしべのように長く垂れた睫毛のしだれと、やや垂れきみの眼のラインとのハーモニーをなし、相余つて醸す退廃的な美。彼はそんな魅惑に構うときではないと振り切つて、訴える。

専務から架空の請求書を水濤社に出せと言われました。そして翌日は水濤社も架空の請求書を出すそうです。先般、大量に返品された不良在庫を水濤社が買い取り、翌月それをうちが買い戻すよう書類を作れということです。監算人も井證券です。僕は」

赤門くん、悪いけど、いまだけ、今回だけやつてちょうだい。銀行の融資が受けられれば契約が取れるのよ。これがうまくいけば、どうにかしばらくは凌げるのよ。お願い」

赤門は呑んだが凌げなかった。凌げなかったばかりではない。内部昇格があつたらしく、税務署が入った。調査が行われ、不正が発覚する。社長も専務も「知らない」と言つた。それだけではない。

赤門課長には前科がある。なぜ対処しなかったのかと言われるかもしれないが、最近知つたばかりで、これから調査しようとしていたところなんです」

専務はそう言つたらしい。

彼らが互いに教唆や共謀や威圧をしないように、質問は別々の部署で行われた。専務の発言は社長の態度を聞いて、赤門は生ま

れて初めて叫びそうになった。

「そんな真逆な、そんな酷い、僕だけじゃない、そんな」

「僕だけじゃない？ 認めることになるが、それでいいんだな」

口をつぐんで下を向いた。家族のことが急に想い出され、涙が込み上げる。

暗くなって、しよぼれて家路に就く。月がなく、外灯も昏く感じる。

教会まで来た。灯りが洩れて扉が開いている。いつもどおりだ。入った。礼拝堂は白い祭壇の上には聖なる十字架があり、その背後に光を象る黄金の太陽のような象徴が輝き、天使が聖書の記された帯の両端を持って翼を広げ飛んでいる。『汝の敵を愛せよ。右の頬を打たれたならば左をも差し出せ。上着を奪う者には上着をも差し出さない』そんな聖書の言葉が脳裏をかすめた。

敵を愛せよ？ 奪う者に差し出せ？ なるほどそれは高潔な行為かもしれない。本人はそれで満足かもしれない。だがそれで不幸になる家族は？ あるはずの幸せを奪われ、泣く妻と子どもたちは、自分がよければそれでいいのか？ 例えは自分の愛する家族を殺したものを愛せるのか？ それが残酷で無慈悲な執着であつても赦せるのか？ できない。できるわけがない。できる奴は非道で無慈悲だ。いや、それ以下だ。それは以前から心に抱いていた疑問だつた。仏教だつてそうだ。出家して修行して苦しむとしても自分の決めた悟りへの道だから自分はよいかもしれないが、捨てられた家族はどうなるのだ。

確かに赦しは尊いし、心理学的に言つても魂を癒す。憎しみは相手に害を及ぼすだけでなく自らも苦しめ、肉体を滅ぼすストレスを与える。そう言へば、以前どこかで、自分の息子を殺した息子の友人を憎んだが、その子と重なり合った瞬間、犯した罪の恐ろしさに震える自分の息子と同じ年の少年を見て、赦す気持ちになり、赦した瞬間に自分の心の苦しみから解放され、救われた……というようなエピソードを読んだことがあるが、それは確かに真理だし、その母親の決断は偉大だし、尊敬に値するし、尊い話だとは思ふが、もし相手が自分の息子と同じような被害者ではなく、凶悪な汚いおきんで、快樂のために虐殺したのだとしたら到底赦す気にはなれないだろう。あつてもだからどうしたらいいのだ？

かなり捨てるように、その場を去る。いつの間にか走っている。やがて家に着くだろう。しかし何にもならない。どこにも逃げ場はない。

家に着いた。何と虚しいところか。しかし現実に戻らなくては。呼吸が落ち着くのを待った。玄関を開ける。ネクタイをかなり捨てるように引つ張り、背広を脱ぐ。衣紋掛けには掛けず、ズボンとともに元氣のない夫を見て妻が尋ねた。

「何かあつたの？」

幼い娘を眺めて涙があふれる。

「ねえ、どうしたのよ、黙っていいいい」

どう説明してよいかわからなかつた。すべての前提条件を話さなければ説明にならない。社長に従つた理由は概ね一通りある。瀬御尉を断れなかつた理由はうまく説明できない。どうして税務署職員に強く反駁できなかったかは……なぜだろう？ 何と遠慮していたのか？ そもそも会社勤めの経験のない妻に、会社のそういう全体的な雰囲気を感じさせることなんて、到底できないような気がした。いや、それ以前に女に男のメンタリテイなんて理解できないんだ。ならばなぜ結婚したんだろう。そんなことを平

ば無意識的に考え耽っている妻が遂に

「あなたって、本当にはつきりしないわね、苛つくのよ。めめめと哭きだけで、何にも言わないって、何それ！ あり得ないんだけど？ バカじゃない？ 何だかわかんなくて不安だわ煽られて超頭来るんだけど？ 言わないなら、哭きな。どっちかにしろっ！」

コップのビールを一気に呑む。

「実は会社で不正があつて」

聴き終えた妻は激怒した。

何なの、それ！ 何であなたが負わされてんのよ、もお、ほんとに、まじっつこい！ 何で言わないの」「言うよ。咄嗟に何て言っていいかわからなかったんだ」

「そのまま言えはいんじゃない、何なの、それ、あり得ない。」「謬じゃないわ、職も失つて罪も着せられて、犯罪者になっちゃうのよ、犯罪者の家族として生きて行くのよ、生活が、未来がめっちゃくちゃだわ。逢瀬紗はどつなのよ」

「わかったよ。だから言いたくなかったんだ。おまえには何もわからない」

言いたくないってどういこと、わかるとかわかんないとかじゃないでしょ、言わないでどうするのよ」

「わかつてるよ、うだうだ言っな、俺を馬鹿にしてんのか」

「どう。。。じゃ、もっいいわ」

妻は娘を連れて別の部屋に行った。

じっと考えている赤門のからだに凄まじい憤怒が噴火のどす黒い煙のように濛々と起った。身勝手な専務の保身に対し、裏切った社長に対し、愚かで浅はかな瀬御厨に、狡猾い世間すべてに対して烈しい憎悪が膚突に湧き起った。それは我が身を護る獣の本能だ。どうして左が差し出せるか。すべてぶつ殺す！

ジーンズを穿き、革のベルトに武器を差し込み、佩いた。キャンプで薪割に使ったアックスだ。サバイバル・ナイフもつかむ。黒豹のように夜を跳躍する。幹部は創社以来の人間なので、皆社の近くに住んでいた。平静の家に着く。アックスでサッシを破り、鍵を開け、暗い部屋の中に入る。物音で出て来た人間を殺した。女だ。平静の妻だ。廊下を歩き、居間に入る。平静は何かが廊下から近附くを感じたのだ。点いているテレビに背を向け、赤門の侵入しようとする入口を監視して立っていた。

「何だ、おまえは、いったい」

「アックスを殺しに来ただけさ。ザマミロ、生ゴミ野郎、貴様を裁判なんてもつたいねえ、貴様らなぐ縄で束にしてゴミと一緒に燃やすがさわしいぜ」

「正気か！ 人殺しだぞ、もつと重い罪だぞ、家族を想い出せ」

「うぜえぜえ」

アックスで脳天をかち割った。噴水のように血飛沫の柱が天井を浄灌のように打つ。サバイバル・ナイフで胴体を裂く。

「さあ、次だ。あははは、あははは、俺は本当の自分に還ったんだ」

「きやあああああ」

黙れ、黙れ、黙れ、黙れ、黙れつ！ 黙らなきや殺す、あ、しょうがねー、殺す、俺じゃない、おまえが悪いんだ、黙りやいい

「ば」

「実らない想いの鬱屈か。うふふ」

「ふふあわははははは」

血塗れの夫を見て叫ぶ。

何なの、あなた！ 何なの、あなた、その恰好！」

逢莉紗が泣き喚く。

わわわわつきやあああああ！」

心のどろろが叫んでいた。殺すな、殺さないでくれ。しかしそれゆゑに炎は滾り、駈られ煽られ、逆噴する。

「ああああはあはあはあは、死ねやつ」

て、毒々しくも美しくきゑあつた。髪を靡かせ奔り、柵や塀を飛び越え、咆哮し、自由闊達極まりなじ。やがて着く

黎明前の光が少し空を明るくする時刻。遺霊院の前だった。まだ門は開いていない。茅葺の葺が次第に青みを帯びてくるのを眺めていた。

茅葺に生ず^む深い苔に秋の明晰な光があたり、苔の青が眼に染み入る。眷^む々なさは喩えようもない。存在はあるがまにであるだけで、美しく、ただ物的な無味乾燥ゆえむしろ奥深くあらゆる哲理を言ひ、甚深である。非情が俚を纂^むして蒼々のような星の天宇のような崇高な神々しき。

葺はここに来たときの幸せな時間を思い出して、妻や娘を想って慟^{なげ}哭した。自殺を考えた。だがやめた。遺族に憎まれ罵倒されて生きようと決す。魂を悔恨に苦しみ、喪われた家族を想って悲痛に苛まれ、身を裂かれねばならない。それが無駄たる事奉た。生きることは袋小路なのだ。